

## 近代犬山における観光基盤の整備

岐阜大学 学生会員 ○鈴木裕也

岐阜大学 正会員 出村嘉史

### 1. 研究の背景と目的

愛知県丹羽郡犬山町は、13世紀頃から木曾川を利用した木材流送の湊として発展した<sup>1)</sup>。福井<sup>2)</sup>は、木曾川上流にあたる大井ダムの建設によって木材流送ができなくなり、さらに明治期以降に主要経済基盤となった養蚕・製糸業は昭和恐慌に伴い衰退する中、大正末頃から機運が高まりつつあった観光が産業の主軸となった経緯を示した。ただし、犬山町内外のステイクホルダーがこのプロセスにおいてどのような役割を担ったのかについては、未だ不明な点が多い。

本研究では、明治から昭和初期に犬山で興った観光事業と各種産業との関係に着目し、犬山の観光基盤が形成された過程と背景を明らかにする。

### 2. 近代犬山における旧藩組織と観光事業

犬山藩は1868(慶応4)年に成瀬正肥を藩主に据えて成立するが、1871(明治4)年の廃藩置県により廃藩となり、1873(明治6)年の廃城令に伴い犬山城は廃城となった。1875(明治8)年には本丸、杉の丸、樅の丸、桐の丸、松の丸とその周辺の山林が「稲置公園」(図-1)として愛知県の所有となる<sup>3)</sup>。

犬山藩士の大部分は東京や名古屋に所在を移したが、成瀬家東京邸において慣例的に例会を開くことで、交流を続けていた。1878(明治11)年には、藩士同士の交流や援助を目的とした「愛親会」を設立し、月次会の開催や困窮者救助、冠婚葬祭時の支援等を行った<sup>4)</sup>。

1886(明治19)年には愛親会によって、自己研鑽と後進の育成を目的とした「犬山壮年会」が設立され、1906(明治39)年には「犬山将来の繁榮を計る爲」に「犬山人和会」が設立された<sup>5)</sup>。

壮年会の発行していた機関雑誌「智仁勇」中の記述によると、成瀬氏は、1891(明治24)年の濃尾地震によって破損した犬山城天守閣の「天守閣や石垣などの破損箇所を速やかに修繕し、旧形を永久に維持する事」や「敷地内の樹木は適宜伐採する事」、「土地及び天守閣は華族世襲財産に編入し、売却や譲渡、質入れ等はしない事」、「前述の条件に背いて土地や天守閣の返還を求められた場合にはこれに応じる事」等の愛知県側から出された条件を受入れ、1895(明治28)年に正式に

犬山城を譲り受けた<sup>6)</sup>。

犬山城地の譲渡以降、1908(明治41)年の犬山城一般公開をはじめとした壮年会員による観光事業が始まる。継鹿尾の不老滝では壮年会員の伊東忠香等が不老倶楽部を設立して物品販売や脱衣所、休憩所などを施設し、1907(明治40)年に開業してから僅か1年で当初想定していた2倍の人数が集まるようになる<sup>7)</sup>。1910(明治43)年には壮年会犬山支部役員の前田鐵造と加藤富藏が、名古屋で開催された第十回関西府県聯合共進会の協賛事業として、成瀬家や郡内の名家から集めた古美術品を犬山城天守閣で展示することを提案し、1,500点を越える美術品が集まった会は盛況を博したとされる<sup>8)</sup>。



図-1 稲置公園敷地と材木置き場 (筆者加筆)

### 3. 犬山町の主要産業

明治後半から旧藩士による観光事業が見られたが、廃藩置県による影響で士族が犬山を離れていた明治期前半に、犬山では新たな主要産業として養蚕・製糸業が勃興した。1909(明治42)年には繭と蚕種の産額が主産物であった農産物の約1.4倍に達しており、養蚕業が副業の域を越えて、農業従事者たちにとって重要な経済基盤だったと言える。

犬山町を含む丹羽郡では、生産した繭を適正価格で販売し、養蚕家の利益を守る為の組合が多数存在し、1888(明治21)年には犬山町で最初の共同揚返場である「金城社」が設立された。その後も犬山町では製糸工場の設立が相次ぎ、1908(明治41)年までに、犬山周

辺の製糸工場数は 41 となったが、1929(昭和 4)年の昭和恐慌の影響で生糸価格が暴落し、昭和初期には犬山の製糸工場数は 2 まで減少した<sup>9)</sup>。

#### 4. 犬山町の花街と芸妓

製糸業の発展と同時期である 1901(明治 35)年頃からは、犬山町では芸妓数が増加している。元来犬山には宿場町の機能の一つとして女郎屋が数軒存在していたが、1872(明治 5)年の太政官布告第 295 号によって奉公人や芸妓の人身売買が禁止され、犬山の女郎屋は廃廓となる。1898(明治 31)年に太政官布告が廃止され、1902(明治 35)年時点で犬山町の芸妓数は 30 名程だったとされている。

この頃の犬山芸妓は宴席での活動の他に、木津堤等の近隣勝地への出張も行っており、壮年会員の中には、犬山の自然を活かした観光事業に芸妓も組み込もうとする者もいた。1906(明治 39)年の犬山壮年会月次会の中で会員の吉原治郎は、「天然の美を占むる犬山なれば尚之に人工美を加へ櫻も藤も杜若も四季折々の花卉を植ふ解語の花も栽培して天下の公園となし英といはず獨といはず米佛蘭總ての外人をして來遊せしむる策を講じなば之より収入する所の金は實に莫大にして現今の幾層倍たらんと陳べらるゝや」<sup>10)</sup>として、豊かな犬山の自然と芸妓を組み合わせることで、外国からの旅行客を誘致すれば莫大な収益が見込めると発言している。

一方で、1895(明治 28)から 1944(昭和 19)年の『智仁勇』に犬山芸妓が外国からの遊覧客をもてなしたという記述がない事や、名古屋鉄道による鉄道敷設や観光地開発が進んでいなかった事から、芸妓を観光地化の一助とする吉原等の思惑とは異なり、明治後期、犬山で急速に発展していた製糸業従事者を遇するために芸妓数が増加していったと考えられる。

その後も犬山芸妓の数は増加を続け、1912(大正元)年では約 70 名<sup>11)</sup>、1934(昭和 9)年には約 150 名となっており、芸妓置屋や検番といった芸妓に関する施設が上大本町、下大本町、西図師町に集中し、犬山における花街を形成した<sup>12)</sup>(図-2)。1912(大正元)から 1934(昭和 9)年の期間は、製糸業が昭和恐慌によって打撃を受け、1923(大正 12)の押切-犬山間の直通運転開始や 1925(大正 14)の犬山遊園地開園といった、名古屋鉄道による開発が盛んになった時期である事から、犬山町や近隣に住む労働者から名古屋・岐阜からの観光客へと芸妓の顧客が変化し、犬山の観光地化に目を付けた名古屋芸妓たちが犬山に移ってきた事で芸妓数が急増したと考えられる<sup>13)</sup>。

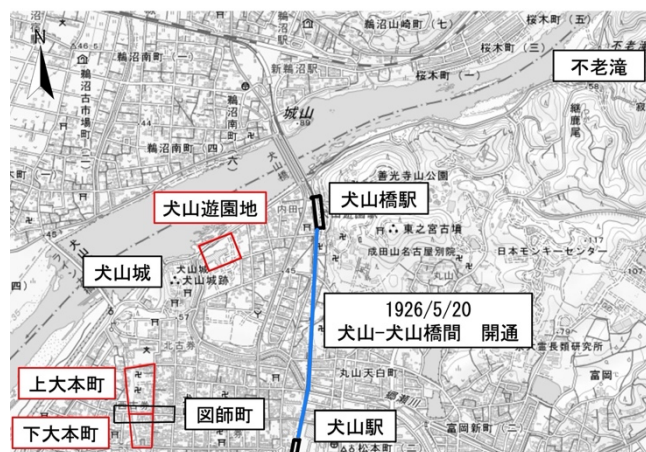


図-2 犬山町 (筆者加筆)

#### 5. 今後の課題

犬山町は、廃藩と共に多くの士族が犬山を離れたことで産業構造に変化が生じ、新たな主要産業として養蚕・製糸業が発展した。製糸業の発展と同時期に犬山の芸妓数も増加しており、太政官布告廃止後の犬山芸妓は製糸業従事者を主な顧客としていたと考えられる。

1929(昭和 4)年の昭和恐慌で犬山町の製糸工場の大半が倒産したが、芸妓の数は依然増加しており、明治後半から始まった犬山の観光地化に伴い、芸妓の顧客は製糸業従事者から観光客へと移っていく。

犬山の花街があった上大本町、下大本町、西図師町では大正-昭和初頭にかけて、製糸業関係者が、所有していた土地を手放す動きが見られる。土地所有者の土地利用の意図、製糸業従事者や外部から流入してきた芸妓・飲食店経営者の動向や相互関係に着目することで、犬山町全体の産業構造の変化とそれに伴う都市経営としての基盤づくりの必然を読み解く。

#### 参考文献

- 1) 八百津町教育委員会錦織綱場保存会：錦織綱場，2008
- 2) 福井彩水：近代の犬山における木材産業の衰退と観光業の黎明，令和元年度土木学会中部支部研究発表会，2020
- 3) 林幸太郎：犬山城にみる近代の城郭と旧藩意識，金鯢叢書 pp. 105-124，徳川林政史研究所，2022
- 4) 林幸太郎：大名華族と同郷会-旧犬山藩主家成瀬家を事例に，金鯢叢書 pp. 103-123，徳川林政史研究所，2021
- 5) 犬山壮年会：智仁勇 第五十七編，pp. 14，同労社，1905
- 6) 犬山壮年会：智仁勇 第九十一編，pp. 45-47，同労社，1905
- 7) 犬山壮年会：智仁勇 第九十編，pp. 71-72，同労社，1908
- 8) 犬山壮年会：智仁勇 第九十八編，pp. 72-73，同労社，1910
- 9) 犬山市教育委員会：犬山市史，通史編 下，p. 197，1995
- 10) 犬山壮年会：智仁勇 第六十二編，p. 66，同労社，1906
- 11) 犬山壮年会：犬山の葉，pp. 145，1912
- 12) 犬山町役場：日本ラインの犬山，p. 100，1931
- 13) 松川二郎：全国花街めぐり，誠文堂，pp. 311-319，1929